

優秀

私達のバリアフリー

旭中学校

1年

高橋 たかはし

歩未 あゆみ

皆さんは、何かで困ったことはありませんか。いつも当たり前のように遊んだり、学校で勉強をしたりしています。しかし、誰にだって一度は、困ったこと、不便なことが起こったことはありますよね。それが何かの忘れ物だったり、病気だったり、或いは骨折をして手や足が使えなかったり、たくさんあると思います。しかし、そんな「困る」「不便」が、一連続くとしたら、どうしますか。

世界には、そんな人々が、あふれかえるようにいます。あなたもその一人だったかもしれません。そんな、『障害者』は、今までどれほどの苦勞をしてきたのでしょうか。

障害には様々なものがあります。生まれつきのものや、ある時急になったもの、事故で負った障害。他にもたくさんあるでしょう。しかし、どんな起こり方してもそれからの人生が大変です。なぜなら、自分が困るだけでなく、家族や周りの人まで巻き込むのです。

障害のレベルにもよりますが障害者は自分一人では生きていきません。例えば、足の不自由な人は車椅子から立ち上がる時は誰かの手が必要です。耳の不自由な人は手話で会話するので、周りも手話を覚えないといけません。そんなものならまだ良い方です。生まれつき体が動かない障害をもっていたら、脳が正常に機能していなければ、誰かがその人を死ぬまで介護しなければいけないのです。

では自分が障害をもっていたとしましょう。耳が不自由な人になりきってください。いつも当たり前のように聞いている周りの声だって、雑音だって、何も聞こえない夜の砂漠に永遠に立たされたような

状態。たとえ目が見えて周りが全て見えたとしても、音がなければ、周りの声さえ聞き取れません。みんな楽しんでそうにしゃべっている。しかし自分には口が動いているようにしか見えない。そんな状況、どれほどつらいでしょうか。手話ができたとしても、手話だけじゃ生活できません。街中の駅で「こつち」と叫ばれても、その人がジャンプして手をふってくれないかぎり気づくことはできない。電話だって、聞いてしゃべるのだからテレビ通話でないと理解することはできない。そんなことじゃ済まされない場面だってあります。人は音を聞き取って気配を感じます。後ろから自転車や車が来れば、気付かないかぎりよけられないので、普通の人よりは事故率だって上がります。そうなれば、耳一つ聞こえないだけであなたの命も奪ってしまいます。

そういった障害者に対して、「くができないくらいどうだってなる」といった言葉をよく耳にします。しかしそれは、自分がそのくをいつも当たり前に「している」、「やっている」、「できる」からです。相手の生活の苦勞は他人にとって正直どうでもいいことです。しかしそれをサポートしている人や、それをずっと見て来た家族がいます。自分の身近に障害者がいたとしたら、あなただって他人事じゃありません。その人はきっとあなたや周りの人達に助けを求めています。常にその人と一緒にいて助けてあげることが難しかったとしても、目立たないような小さなことでもその人には助けになっていると思います。

しかし、その、「人を助ける」ということが私にもなかなかできません。なぜなら、その勇気がないからです。たった一言声をかけてあげればいいだけのこと。しかし、障害者とふれあう緊張感、気恥ずかしさに打ち勝てないのです。でも周りが皆、助けていたら、当たり前のことのように声をかけるはず。そんなれば、ずっとサポートし続けている人も、一人から、周りにいる人全員になるのでどちらにとっても良いことです。

私はこの作文で、「障害者」と書いているのですが、それは間違っているのかもしれない。障害者にとつて、障害者と言われることは、どんな気持ちなのでしょう。私だったら、自分の障害を受け入れて、自分なりに普通の人間として生きていきたいです。そこに障害者と言われたら、複雑な気持ちになると思います。しかし、「障害者」としか言いようがないのです。心の中で、そのことについて気にしている人は、たくさんいると思います。街のバリアフリーは整っていても、心のバリアフリーを整えなければ、その人は一生悩んでしまいます。なので、障害者という言い方を変えたり、ふれあう気恥ずかしさに勝つ勇気を持つことで、その人達の人生を、一変させることができるのではないのでしょうか。

その人達と自然に関わる人が増えれば増えるほど、その人にとつて、日常生活に安心感をもてると思います。あなたも、私も、心のバリアを解けるように頑張りますよ！

